鹽をつけうちくべて燒なり、此製古きことゝ見えて、宗鑑が犬筑波集、ゑやうじの汁にまじるふゑやうじ、雉やきをよく〳〵見れば豆腐にて、淀河に此句に付て不審たつほど、まづ白なゑほ注に、きじ燒はやき鹽付る故なり、（雉やきも鹽やきなるべし、これをおもへば、まことの、又たぬき汁は、獸の歌合五番左、狐つかの穴ゑもん、右たぬき汁のこんにやくと有り、今も蒟蒻を汁に煮てゑか呼なり、篝絨輪寮の窗つまは焦さじ扇なり、結句、狸汁にばけるこんにやく、芙容文集、桃鏡と云もの、こんにやくの文に、或はたぬき汁と化して舌つゞみを打する、一際風流のさたなり、又鳴燒のことも雜考にいへり、精進のは庖丁聞書に、鳴壺といふは、生茄子のうへに、枝にて鳴の頭の形つくりて置なり、柚味噌にも用とあるは、猶まことの鳴を用ひたるさま殘れり、其後は名のみにてもとの形なし、料理物語に、鳴やき、茄子をゆで、よきころにきり、串にさし、山椒みそ付てやくなり、慶長このかた今の形となれりとみゆ、寛永發句帳、德元が句に、鳴やきなすびなれど、もとより肴、佐夜中山集、鳴やきはかならず秋の茄子哉、

〔精進魚類物語〕納豆太その儀ならば、精進の物共、促せとて、鹽屋といふものをもつて、先身ぢかくしたしきものなれば、すり豆腐權守につげけり、道德といふ物、みそかにはせめぐりて催けり、先六孫王よりこのかた、まむぢう素麵をはじめとして、蒟蒻兵衞酸吉、午房左衞門長吉、大根太郎、苣次郎、蓮根近江守、大角山城守、渡邊黨には、薗豆武者重成、茗荷小太郎、蒡角戸三郎いらたか、笋左衞門節重、納豆太郎糸重、甥の唐醬太郎、同次郎、味噌近冬、苽新左衞門、獨活兵衞尉、蕗源太苦吉、蕎麥大隅守、薯蕷藤九郎、芋頭太宮司、煎大豆喫太郎、こたうふの權介、實莘新左衞門、河骨太郎秋吉、昆布大夫、荒和布新介、青海苔、昆布、苔、鷄冠、雲苔太郎、山葵源太、苽五色太郎、松雛壹岐守、（略○中）熊野侍には、柚皮庄司、糀太左衞門、青蔓の三郎常吉を始として、以上其勢五千餘騎、久かたや雲の梯引おとし、分取高名我も我もとおもはれける、